

# 映像学部における学生育成プログラムの構築

——基礎演習科目「プロデュース基礎演習」を実践するための授業支援

古島 夏樹 (映像学部事務室)  
事務長補佐  
伊藤 昭 (大学行政研究・研修)  
センター専任研究員  
浅野 昭人 (教育学部次長)  
澤田 博昭 (映像学部事務室)  
事務長

## I. 研究の背景

1. 映像学部の人材育成・教学内容と一期生の特徴
2. 映像学部教学のコアとなる小集団科目「プロデュース基礎演習」とその課題

## II. 研究の目的

## III. 研究の方法

## IV. 調査結果

1. 2007年度の映像学部オリター（授業支援者）の活動内容について

## 2. 「プロデュース基礎演習」に関する調査

3. 国内の大学調査
4. 米国の大学調査
5. 調査のまとめ

## V. 政策提起

1. プロデュース基礎演習の高度化について
2. 研修プロセスの授業プログラム化・単位化について

## VI. おわりに

## I. 研究の背景

### 1. 映像学部の人材育成・教学内容と一期生の特徴

#### (1) 映像学部の人材育成・教学内容

2007年4月、立命館大学における10番目の学部として、映像学部<sup>1)</sup>が誕生した。映像学部が育成する人材とは、「映像制作から、企画・法律・資金調達・配給などを総合的にリードできるコンテンツ・プロデューサー、豊かな教養と感性・技術を携えた映像クリエイター、映像に対する深い知識と分析能力を持ち合わせた映像文化研究者。」(設置趣旨より)である。

この人材育成を達成するための教学内容は、『「アート(美術)」(例：映像制作、ゲームデザイン、CGアニメーション)、「テクノロジー(工学)」(例：画像処理、バーチャルリアリティなど)、「ビジネス(経済学)」(例：メディア産業、コンテンツビジネスなど)の3つの側面から映像学を学び映像コンテンツに関わる「プロデュース能力」を養成すること』(設置趣旨より)である。

立命館大学初の芸術を含んだ文理融合型学部であり、教学内容にあるプロデュース能力育成や映像制作におけ

る実習など独自の教学内容を展開している。

#### (2) 一期生の特徴

一期生として168名の1回生が入学し、上記にある映像学の学びをスタートさせている。入学してきた学生の特徴は、立命館大学の映像学部で映像を学びたいという、明確な目的意識を持っているということである(図1～3)。また、多様な入試形態により、様々な能力を有した学生が入学している。

映像学を学びたいとする高いモチベーションを持った学生の力をいかに活用するのかという課題認識を持っている。(図4)

### 2. 映像学部教学のコアとなる小集団科目「プロデュース基礎演習」とその課題

#### (1) 「プロデュース基礎演習」の演習実践の内容について

映像制作は、一人で制作することは難しく、様々な能力を持った多くの人材を活かしながらひとつの作品を作り上げていく必要がある。ひとつの映像作品を世に送り出すまでには、企画・制作・発表など一連のプロセスをプロデュースする能力が必要である。この「プロデュース

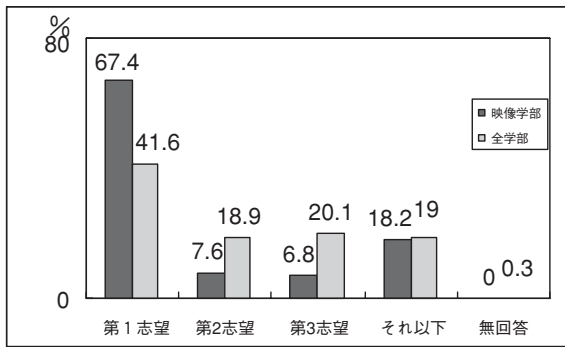


図1 立命館大学の志望順位

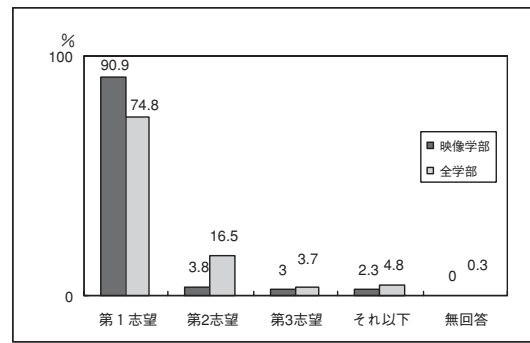


図2 現在の学部の志望順位

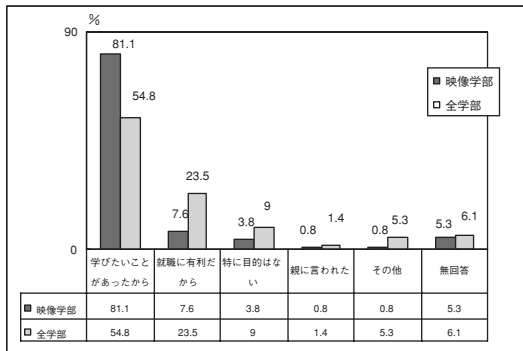


図3 大学に進学した動機

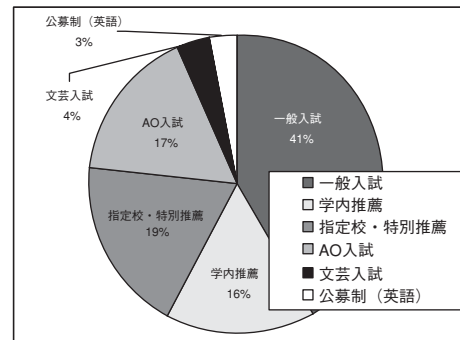


図4 2007年度入学者の入試方式区分（多様な入学者）

基礎演習」で身につける能力を「映像学の基本的な知識、読解力」、「表現力、企画力、マネジメント力」とし、小集団の中における演習を通して、体得することを目的としている。映像学部教員による講義により、「映像学の基本的な知識、読解力」を身につけることとし、「表現力、企画力、マネジメント力」については、グループワークを通じて身につけることとしている。（表1）

このグループワークでは、1クラスの受講生33～34名に対して、授業支援を担当する上回生の学生を各クラス5名配置し（1学年5クラス）、グループワークの進行や支援をきめ細やかな支援・指導・サポートを行う。

しかし、映像学部の上回生は、今年存在せず、各学部の上回生から構成される映像学部オリター<sup>2)</sup>（表2）の協力のもと、実施するとしている。

【教員の役割】

- ・映像に関わる講義担当。グループワーク全体の構成を立案。
- ・映像学部オリター担当分のグループワークが円滑に進むよう指導。
- ・各プレゼン手法や発表方法などの批評及び講評。

【映像学部オリター（授業支援学生）の役割】

- ・グループワークの進行。
- ・グループワークに関する各種補足資料の作成。
- ・課題作成の支援。
- ・授業結果のフィードバック。

(2) 「プロデュース基礎演習」実施における来年度の課題

この基礎演習の実施においては、映像学部オリター（授業支援学生）の存在が不可欠であり、彼らの協力なくして、今年度初めて実施とされこの基礎演習の成功は無かったと思われる。しかし、2007年度の映像学部オリター（授業支援学生）は、他学部生の上回生で構成されており、2007年11月、解散される。

2008年度からは、現在この授業を受講している映像学部の1回生が映像学部オリターを引き継ぐ者として、この授業支援を行うことが求められるが、授業実施に向けた事前の準備や力量形成をどのように育成していくのかという点で課題が残されている。

II. 研究の目的

「プロデュース基礎演習」において活躍できる授業支援学生を育成するためのプログラムを構築する。そのた

表1 「プロデュース基礎演習」シラバス（映像学部講義概要より）

回数	授業内容	映像学部オリターの担当内容（以下の内容の運営・進行）
1	合同ガイダンス	-
2	①教員による講義（各クラス）	-
3	①ディスカッション／グループワーク	プレゼン手法（要約のしかた）、会議の仕方（意思決定ゲーム）
4	②教員による講義（各クラス）	-
5	②ディスカッション／グループワーク	クリティカルパス（計画手法）、リサーチ手法
6	③教員による講義（各クラス）	-
7	③ディスカッション／グループワーク	ライティング（企画書の書き方）
8	④教員による講義（各クラス）	-
9	④ディスカッション／グループワーク	ブレインストーミング手法（マインドマップ、KJ法）
10	⑤教員による講義（各クラス）	-
11	⑤ディスカッション／グループワーク	ロジックツリー：（大量の資料から自分の論点に有利な内容を探し論ずる、グループで話し合いその中で代表的な意見をまとめる。）
12	グループワーク	発表準備
13	プレゼンテーション	クラス内プレゼンテーション
14	合同プレゼンテーション	
15	まとめ	-

※授業スケジュールのグレーの箇所は映像学部オリターが支援したグループワークの内容

表2 2007年度 映像学部オリター 所属学部・回生・人数

	2回生	3回生	4回生	計
法	2	-	2	4
産業社会	14	4	-	18
政策科学	7	-	-	7
文	1	2	-	3
計	24	6	2	32

めに、2007年度の映像学部オリターが果たした役割の有効性について検証し、2008年度以降の「新しい授業支援学生」を育成するプログラムに反映させ、「プロデュース基礎演習」をさらに高度化すべく研究する。

### Ⅲ. 研究の方法

#### 1. 2007年度の映像学部オリター（授業支援学生）の活動内容について

「プロデュース基礎演習」が始まる前に行ったとされる映像学部オリターの育成について、その内容を2007年度の映像学部オリターからインタビューし、検証する。また、授業の改善点などについてもインタビューし、授

業の高度化につなげる。

#### 2. 「プロデュース基礎演習」に関する調査

##### (1) 受講生の評価（アンケート調査）

「プロデュース基礎演習」を受講した1回生に対して、映像学部オリター（授業支援学生）の果たした役割が有効であったか検証を行う。

##### (2) 教員の評価（インタビュー）

「プロデュース基礎演習」を担当した教員にインタビューを行い、この授業における授業支援学生の有効性について検証を行う。

##### (3) 映像学部オリター（授業支援学生）の評価（アンケート調査、インタビュー）

映像学部オリターに対し「プロデュース基礎演習」を行って、有効であった点、改善点、自身の成長について調査を行う。

### 3. 国内の大学調査

国内の映像学を学ぶことのできる美術大学を訪問し、どのような形態で、映像学の教育を行っているのか調査を行う。また、特色GP獲得の大学の中で、小集団において学年を越えた縦のつながりの教育を実践している大学を調査する。

### 4. 米国の大学調査

映像学を学ぶことのできる米国の大学を訪問し、どのような形態で、映像学の教育を行っているのか調査を行う。

## IV. 調査結果

### 1. 2007年度の映像学部オリター（授業支援者）の活動内容について

映像学部オリターに対して、「プロデュース基礎演習」が始まる4月までの期間どのような準備、研修を行ってきたのか調査を行った。

#### （1）事前の準備・研修の概要とスケジュール

##### ①事前の準備・研修の概要とスケジュール

インタビューによる調査をおこない、以下のスケジュールで事前の準備・研修を行っていたことが確認できた。（事前準備・研修のスケジュール）

10～12月 映像学部オリター団の募集。メンバー決定後、役職担当の決定。

1月～2月 教員と「プロデュース基礎演習」についてのオリターの役割について協議。

（週に一回、教員との打ち合わせ）

方針に基づいてオリターのメンバー内で勉強会や教員からのレクチャー。

（映像学部学生の人材育成・教育内容、グループワークの内容など）

3月 模擬授業。実施後、修正点などを教員と協議。具体的な授業の準備を行う。

具体的な授業の準備については、授業の始まる3ヵ月前から始めた。映像学部オリターは、基礎演習担当教員より、初めに映像学部の人材育成・教育内容、学部教学の基本的な理解についてのレクチャーを受け、映像学部

の理解を深めた。次に、「プロデュース基礎演習」で映像学部オリター（授業支援学生）が行う授業の内容とその進め方についてレクチャーを受けた。週に一回程度、担当教員と打合せを行った。映像学部オリターが授業支援するグループワークの進め方の方針が決まると、その内容に従い、映像学部オリターの中で、そのグループワークの内容を深めるための勉強会や、グループワークを進める方法について議論を行った。グループワークの内容（マインドマップ、KJ法など）に関して、担当教員から、20数冊の本を参考文献として指示され、文献についても参考にしながら、グループワークで実施する内容について、深めていった。

3月には、模擬授業を行ない、実践に近い形でのグループワークを実施し、改善点を洗い出し、本番の授業に臨んだ。

#### （2）授業期間での進め方

グループワークの授業実施後、教員と映像学部オリターと打合せの機会を持ち、授業の反省と次回のグループワークの進め方や内容について議論を行なった。また、セメスターの中間時点で授業アンケートを受講生に対して実施し、それ以降のグループワークに活かすようにした。

### 2. 「プロデュース基礎演習」に関する調査

#### （1）受講生の評価

##### ～「プロデュース基礎演習」グループワークについての中間アンケート結果～

本アンケートは、「プロデュース基礎演習」の授業後に、主に授業支援を行っているグループワークの内容・方法について尋ねるという趣旨で、受講生にアンケートを行ったものである。初年度の授業ということもあり、セメスター中間時点で、授業支援の進め方や内容、映像学部オリターの役割が効果的であったか否かという点で、質問項目を設定した。

・実施方法 「プロデュース基礎演習」授業終了後、アンケート用紙配布、回収。

・実施時期 2007年5月末

・対象者数 168名（映像学部1回生 受講者 全員）

・回答者数 131名（回収率78%）

#### ①授業支援（グループワーク）の進め方について

映像学部オリターが担当する授業支援について、主に

グループワークの進め方やグループワークの説明の方法についての内容を問う項目を設定した。「映像学部オリターが授業支援を行うことについて」（図5）とする回答は、「たいへん良い」「良い」とする意見をあわせると、93%であった。また、授業を行なう上でのグループワークの説明の方法に関する部分について良いとする回答は、「映像学部オリターの作成した補足資料について」（図6）では、90%、「パワーポイントは効果的に使用されているか？」（図7）では93%であった。「映像学部オリターの進めるグループワークの進行度合いは適切ですか？」（図8）については、良いとする回答は、88%であった。

この結果から、受講生は、映像学部オリター（授業支援学生）が行うグループワークの進め方、説明の仕方について、たいへん好評であり、有効であったと推測できる。

②グループワークでの映像学部オリターの効果について

授業内でのグループワークに関する映像学部オリターの効果については、「サポート」（図9）「コミュニケーション」（図10）の点で設問を設定した。結果は、「役にたった」「適切であった」と良いと解される回答は、サポートの点で97%、コミュニケーションの点では、93%であった。

この結果から、映像学部オリター（授業支援学生）が受講生に行う指導の点についても非常に高い満足度があったことが伺える。

（2）教員の評価（インタビュー）

「プロデュース基礎演習」を担当した教員から、映像学部オリター（授業支援学生）に対する評価を得るためインタビューの形態で調査した。この「プロデュース基礎演習」では、グループワークを演習の重要な機能と位

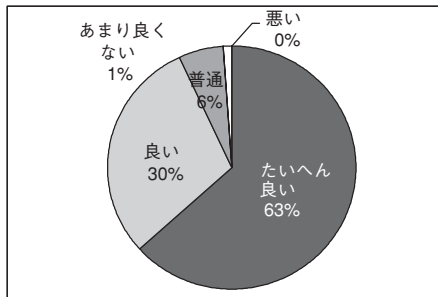


図5 映像学部オリターが授業支援を行うことについて

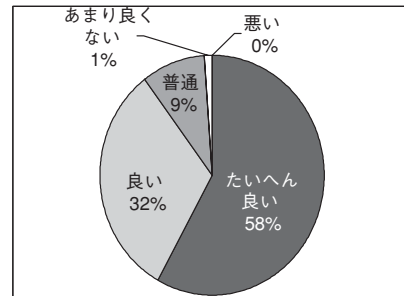


図6 映像学部オリターの作成した補足資料について

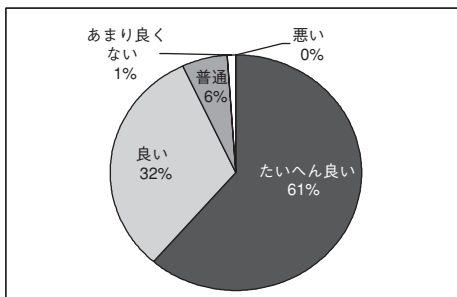


図7 パワーポイントは効果的に使用されているか？

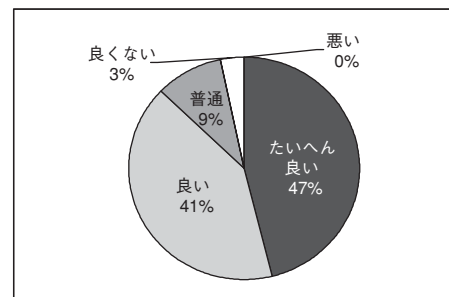


図8 グループワークの進行度合いは適切か？

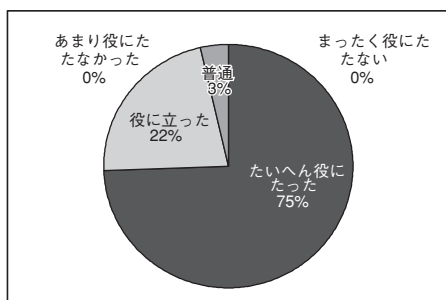


図9 映像学部オリターのサポートは役にたったか？

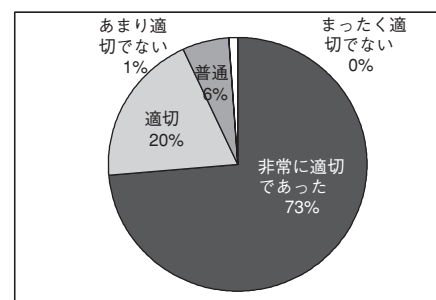


図10 映像学部オリターはあなたの質問に適切にこたえられましたか？

置づけている。教員1名だけで、33～34名の受講生、5グループに分かれるグループワークを決め細やかに指導することは難しい。担当教員からの意見では、今回の映像学部オリターの役割が、このグループワークを実現するのに必要不可欠な存在であったとの回答が得られた。また、映像学部オリター（授業支援学生）は、非常に熱心に取り組んでおり、グループワークの進め方においても、様々な意見を持ち寄るなど、授業を成功に導くために大きく貢献したとのことであった。

グループワークを行う内容（KJ法、マインドマップなど）についても、自発的に学習を進め、多くの時間をこの授業の準備に費やしていたことについても、評価していた。担当教員や受講生に対してのコミュニケーションも、自ら積極的に進めていたとの意見もあった。

この結果から、グループワークでの演習形態において、映像学部オリター（授業支援学生）が果たした役割は、有効であったことが伺える。

### （3）映像学部オリターの評価（アンケート調査、インタビュー）

#### ～映像学部オリターによる授業支援における自己評価アンケートの分析～

映像学部オリターが、授業支援を担当したメンバーに対して、授業支援を終えてのアンケートを実施した。その内容を参考に分析することとする。

- ・実施方法 前期 Semester 終了後、映像学部オリター内で配布、回収。
- ・実施時期 2007年7月下旬（Semester 終了時点）
- ・対象者数 25名（映像学部オリター内で、授業支援を担当した学生数）
- ・回答者数 20名（回収率80%）

#### ①-1 映像学部オリターから見た授業実施の形態について

「グループワークの内容は1回生にあっていたと思いますか？」という質問項目がある。回答した20名中、16名（80%）は、「合っていた」との回答であり、授業のプログラムとして設定したグループワークの内容の難易度が適切であったことと、映像学部オリターが授業支援を行った内容を1回生が理解してくれていると感じていることも伺える（図11）。

また1クラス（受講生33～34名）に対する映像学部オ

リターの配置人数についても、16名（80%）が今年度実施の1クラス5名が適当であったと回答している（図12）。

この結果から、グループワークでの支援学生の人数についても、適切であったと伺える。

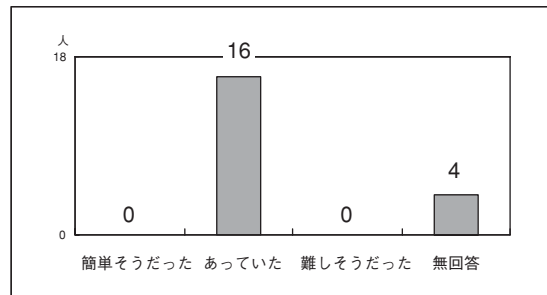


図11 グループワークの内容は、1回生に合っていたと思いますか？

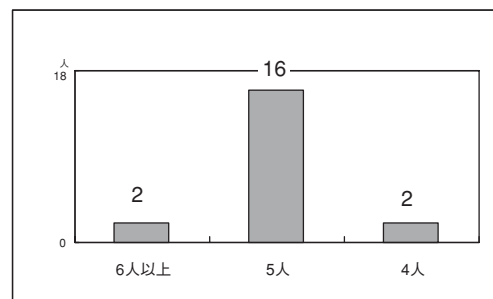


図12 1クラスに対するオリターの配置人数（現状5名）

#### ①-2 映像学部オリターの感じる問題点

上記のアンケートにおいて、この授業支援を通じて感じたことを自由記述で書いてもらった。多くの回答は、映像学部オリター団として、授業支援に取り組めたことを良かったと評価しているが、「授業支援の準備・実施に対する負担」を訴えるオリターが少なからず存在した。

また、この基礎演習の続き時限で、小集団の自主的な学びとしてサブゼミアワーという時間帯があり、2007年度は主に、「プロデュース基礎演習」のグループでの課題を行う時間として使っていた。映像学部オリターの感想では、このサブゼミアワーを「プロデュース基礎演習」で学んだグループワークを活かして、映像制作の実践を自主的に行う場として活用してはどうかとの意見があった。映像学部出身ではない2007年の映像学部オリターのメンバーでは、映像制作に関わる助言・サポートまではできなかったため、実現できなかったという意見であった。

②映像学部オリターの成長について

本学学生部による全学部のオリターを対象とした「オリター登録書・報告書」という調査書がある。オリターのメンバーが自分自身の能力を6つの視点（積極性、社会性、責任感、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、問題解決力）で自己評価したものである。自己評価の時点は、オリターに入団した時点（12月）、授業が始まる時点（5月）、授業期間が終った時点（7月）の3つの時点で評価するものである。

②-1 映像学部オリターの自己成長と他学部オリターとの比較

映像学部オリターの各能力は、結成時の12月から授業支援終了時の7月までの時点において、全ての項目において上昇するという結果になっている。この授業支援の経験を通じて自己成長したことが伺える（図13）。他学部のオリターと比較しても、各能力の平均値は、どの定点をとっても平均よりも高い値を示しており、この結果からも、この授業支援の取り組みが、自身の成長を高い値で達成していることに貢献していることが伺える（図14）。

②-2 映像学部オリターの自己成長に関するインタビュー

映像学部オリターへのインタビューを行った結果、以下の点について成長したと実感している。

〈成長した点（主なインタビューの結果）〉

- ・交渉力、物事をすすめることのできる力が身についた。

・教えることで、自身の理解が深まった。

・教員やメンバーの様々な意見を、ひとつにまとめあげることができた。

・物事に対する考え方はひとつではなく、いろいろなものの見方があることに気づき、柔軟に物事を考えられるようになった。

この結果は、上記のアンケート結果を裏づける内容となっており、「プロデュース基礎演習」での映像学部オリター（授業支援学生）の参加は、受講生にとって有効な授業であっただけでなく、映像学部オリター（授業支援学生）の成長も促す結果になっていることが伺える。

3. 国内の大学調査

(1) 国内美術大学の調査結果

①調査結果（2007年7月、訪問によるインタビュー調査）

調査した2つの美術大学において、大学が提供する仕組みとしての教学における学生同士の学び合いや学生の教学参加という仕組みは存在しなかった。

あわせて学生同士の学び合いという点について、学生同士の縦のつながりがあるかどうかヒアリングをおこなった。この2つの大学においては、学科からさらにコースに細分化され、学生の集団の単位が少人数に分けられることになっている。その結果、学生の中から自然と学年を超えたつながりができ、互いに協力が必要な時には、集団で活動することがあるというものであった。大学側としても、学年をこえたつながりで互いに刺激を受けるような作用を期待しているという声があった。

結果として、小さなコミュニティと学年を超えた縦のつながりで、技術、グループワークを身につける機会を、

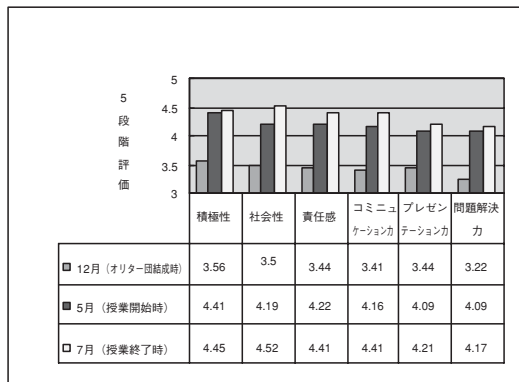


図13 映像学部オリターの自己評価した6つの能力の成長について

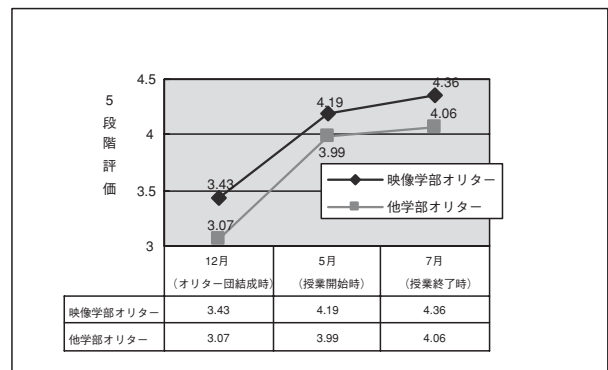


図14 自己評価（6つの能力の平均）の映像学部オリターと他学部オリターの比較

※図13、14は、2007年度学生部実施アンケートの「オリター登録書・報告書」より抜粋

継承しているというものであった。

## (2) 特色 GP 獲得の大学調査

自由が丘産能短期大学「タテよこ交流に始まる学内サービス学習支援」

～『キャンパスサービ斯拉ーニング』(2004年度採択プログラム)<sup>3)</sup>～

2004年度に特色GPに採択された自由が丘産能短期大学の事例を調査した(自由が丘産能短期大学Webページ、文部科学省Webページによる調査)。「タテよこ交流に始まる学内サービス学習支援」というプログラムの内容は、次のとおりである。

### ①プログラムの内容

学生がキャンパス内でサービス活動(授業支援、新入生オリエンテーション、学内行事の運営など)を行うことによって、キャンパスの活性化、学生スタッフの人的成長を目指すというものである。これらの活動は、学生の自主的な参加に基づき、Sanno Student Staff (SSS) と呼ばれる学生スタッフ組織が活動している。卒業生、在学学生、入学予定の高校生と一緒に活動することで生まれるタテの交流や学生同士のヨコの交流を通じての、達成感や充実感によって、豊かな人間性を形成することを目的としている。継続的な活動と全学的なフィードバックを実施し、より良いものを作り上げていくというものである。

〈Sanno Student Staff (SSS) の活動例〉

「オリエンテーション・スタッフ」

新入生ガイダンスやオリエンテーション・キャンプで新入生をサポート、学生生活の相談。

「SA (Student Assistant) スタッフ」

入学前のパソコン学習で高校生をサポート。パソコン初心者の高校生を指導。

「PALM スタッフ」

学校行事(入学式、学園祭、卒業式など)の取材活動および編集作業。

「SEED スタッフ」

キャンパス内リサイクル活動、美化活動、防犯活動の推進。

### ②大学としてのサポート体制

職員は、上記の活動に対するアドバイスをを行い、教員はパーソナルサポート(個人指導)を行う。この活動を学園全体で支援する体制が整備されている。

### ③単位化

この活動は、課外活動であるが、2年間活動を続け所定の条件を満たした学生には「キャリア教養」分野に属する「キャンパスサービ斯拉ーニング」という科目で2単位が与えられる。

上記のように授業支援だけでなく、学内における様々な活動に対して、学年を超えたタテヨコの関わりの中から、学生の学びの達成感や人間形成を実現させ、単位として認定する点が、非常に特色ある活動となっている。

## 4. 米国の大学調査

米国の映像関連の教学を行う大学で、どのような映像教育を行っているか調査を行った。

### (1) New York University の調査内容 (2007年9月、訪問によるインタビュー調査)

#### ①New York University の概要

創立1831年の共学の私立大学であり、法学部、医学部など14の学部を持つ総合大学である。学生数19,401人、大学院生31,516人が学ぶ米国屈指の名門大学である。その中にあるTisch School of the Arts (芸術学部)に属するITP (Interactive Telecommunications Program (大学院課程))を調査した。

#### ②Tisch School of the Arts ITP (Interactive Telecommunications Program) の教学内容について

この大学院の専攻は、インタラクティブコミュニケーション(双方向通信)、新たなコミュニケーションやメディア、それを用いた芸術について研究する学科である。1971年に創設され、近年のインターネットの普及、コンピュータ性能向上、それらを利用したメディアアートまで、今後もこのITPが対象とする研究領域はますます広がっているという。

入学する大学院生は、必ずしもこの大学院で学ぶに必要なスキル(美術系・工学系の技術)を持ち合わせているとは限らないため、ITPでのプログラムを学ぶために必要な基礎科目を設置し、必修科目としている。その内容は、「プログラミング」、「工学」、「アート」である。これらの科目をはじめとする技術が必要な科目についての指導体制について、特徴的なものが多く以下にその内容を記述する。

#### ③学びのスタイルと環境整備

New York University の優れた点は、小集団での学びの環境が整っていることである。学生が作業する場所と教



員の研究室との距離が近く、疑問に思った点などについては、教員からのサポートを受けやすくなっているという。また、教員だけでなく、上回生もしくは、卒業生を、教育をサポートするアルバイトとして雇用して、低回生の教育サポートを行っているということであった。

#### ④-1 チームによる学習

授業は、チーム（グループ）での学習が中心となる。学年が混在する形が多く、上級生が下級生に対して指導するような場面も多い。このチームでの学習で重要な点は、チームで映像を制作するのに必要な役割分担ということである。自分は何ができて何ができないのか、誰の能力が必要なのかを判断する能力が重要であるとのことである。全ての事柄に精通する必要はないとの考え方であった。その理由は、最近の映像制作は、様々な技術や分野が融合しての映像制作が多く、幅広く学ぶという姿勢、知識がないと現在の映像界には適応できないからとのことであった。

卒業プロジェクト（制作）は、クラス単位でおこなっている。クラスのメンバーから意見をもらい、フィードバックすることで作品がよくなるからということであった。

#### ⑤-2 指導体制

院生にインタビューしたところ、「教員がすぐに教えてくれるので、出身学部で学んでこなかった技術についても心配ない」との声があった。そこで、どのような指導体制を整えているのか質問した。フルタイムの教員が10人おり、オフィスアワーを設定しているとのことであった。オフィスアワー以外の時間も教員はオフィスにいたことが多く、自由に教えを請うことができるとい（訪問時、教員のオフィスのドアは開放されていて、自由に院生が教員とコミュニケーションをとっている風景を見ることができた）。

上記の体制以外に、卒業生を7～8人雇用して、制作に関する技術の点について、サポートさせる仕組みがあるとのことであった。

#### ⑥ ITPが望む院生像について

ひとつのことがらだけを追求するというようなタイプの院生には、他の大学院に行くことをすすめている。幅広く学ぶという姿勢、知識がないと今後の映像界には適応できないからということであった。映像制作の世界は、一人で制作することは難しいため、この大学院で、チーム制作について学ぶことが重要だと語っていた。また、大学院生なので、自由で、自主的に学んでいくことが重

要であるという考えを持っていた。

New York Universityでも、グループワークを重要視し、学生内での縦横のつながりが強く存在していた。小集団での学びが大学・学部の教学を支えていることが伺える。

## 5. 調査のまとめ

### (1) 「プロデュース基礎演習」での映像学部オリター（授業支援学生）の有効性

#### ① 受講生、教員からの評価

受講生からの評価にあるとおり、グループワークでの進行や、グループワークの内容説明に使用する手法（パワーポイントなど）、補足資料など映像学部オリター（授業支援学生）が行った支援は、いずれも高い評価となっている。また、グループワーク実施時の各グループへのサポート、受講生とのコミュニケーションも高い評価を得ている。受講生からすれば、身近な上級生の存在が、学びの手本となり、サポートしてもらえることで、より深く内容を理解することができたということがわかる。

教員からの評価にあるとおり、ひとりの教員が1クラスにつき5グループの小集団を90分間で、密に指導することは難しく、この授業において映像学部オリターという授業支援の学生の存在は不可欠である。「プロデュース基礎演習」の授業目的からも十分にその成果を果たしてくれたということがわかる。また、グループワークの手法についても、学生の視点で手法説明の工夫を果たすなど、有効であったと考えられる。教員とのコミュニケーションについて、事前の準備期間が3ヵ月程度あり、映像学部の教学やプロデュース基礎演習の趣旨についても、教員と映像学部オリター（授業支援学生）との間で十分議論できたことが、スムーズに進んだ要因と考えられる。

以上のことから、「プロデュース基礎演習」における映像学部オリター（授業支援学生）の役割は有効であったと考えられる。

#### ② 国内大学・米国の事例調査からみる映像学部オリター（授業支援学生）の有効性

国内の美術大学の調査や、New York Universityの事例からも、映像制作におけるグループワークの重要性、上級生と下級生という縦のつながりの必要性が指摘されて

いる。国内美術大学のように、自然発生的な、上級生からの指導を伴うグループワークという文化の醸成もある面必要なことなのかもしれないが、New York Universityのように、大学として、上級生のサポート体制を築いて映像制作を推進していくことが、新学部である映像学部には必要であると考えられる。特色GP獲得の大学のように、教職員の体制や単位化という部分についても高度化の視点が必要である。

## （2）「プロデュース基礎演習」の課題

映像学部オリター（授業支援学生）の評価では、「プロデュース基礎演習」は、そのグループワークの内容・難易度や、授業支援学生の1クラス配置の規模についても、実施した内容は、適切であったと考えられる。しかし、以下の2点について改善が必要であると分析する。

### ①サブゼミアワーの活用・改善

基礎演習のクラスにおける自主的な学びを行うために設定されたサブゼミアワーは、グループワークの課題作成の延長という形態で実施されていた。映像学部オリターの指摘では、「プロデュース基礎演習」で学んだグループワークを活かして、映像制作の実践を自主的に行う場として活用してはどうかとの意見があった。この指摘のとおり、授業支援学生の指導・サポートのもと活用することが改善すべき事項である。

### ②「プロデュース基礎演習」で学んだグループワークと映像学部実習科目との連携

「プロデュース基礎演習」は、映像制作の実技を学ぶのではなく、映像制作に必要なグループワークを学ぶことが目的である授業であった。しかし、ここでのグループワークの学びがどのように映像制作に活かされるのか、1回生が学んでいる映像制作の実習授業とどのように関わっているのか、具体的に示しながら、サポートすることも必要ではないのかとの意見も多く、この点についても課題であり、改善点とすべき事項である。

## （3）研修プログラムに必要な要素

調査の結果、研修プログラムに必要な内容として、グループワークの内容の理解はもちろんのこと、教員との十分なコミュニケーションと、授業支援学生内でのグループワークの効果的な進め方に関する議論が必要である。また、次年度の授業支援学生となるメンバーは既にこの授業を受講生として体験しているため、受講生の視

点でグループワークの改善点を持ち合わせていると考えられ、このFD的な視点で、グループワークを高度化することが可能であり、この点についてもプログラムに組み込むべき視点であろう。

前述の（2）にあった課題についても、教員と授業支援のメンバーが議論して、改善を提起するプロセスも必要だと考える。これらの集大成として、模擬授業（グループワークの模擬授業）を実践し、終了後、改善点を議論し、実際の授業支援に望むことが、調査の結果からも有効であると考えられる。

研修プログラムに必要な期間は、今回の成功例から、映像学部オリターの要した3ヵ月が妥当であると判断する。

## （4）調査分析を終えて～映像学部オリター（授業支援学生）にもたらした効果～

「プロデュース基礎演習」における授業支援という行為は、映像学部オリター（授業支援者）の成長が自身で認識できるものであり、受講生だけでなく、彼ら自身にも寄与できるものであったと考えられる。前述の学生部のアンケート（図13）で、成長したとされる能力（積極性・社会性・責任感・コミュニケーション力・プレゼンテーション力・問題解決力）は、この「プロデュース基礎演習」で身につける能力を「表現力、企画力、マネジメント力」に通ずる能力も含まれている。映像学部オリター（授業支援学生）が、グループワークを企画し、その内容を様々な手法で表現し、グループワークを実行・進行し、受講生からの評価からフィードバックし、最後に自己評価するという一連のマネジメントを行ったことで、映像学部オリター（授業支援学生）は、実際の「プロデュース基礎演習」を通じて、グループワークをプロデュースするという行為を実現したことになる。

## V. 政策提起

### 1. プロデュース基礎演習の高度化について

#### 授業支援学生が企画（プロデュース）する自主的な学び～サブゼミアワーの活用～

「プロデュース基礎演習」で学んだグループワークを活かして、映像制作の実践を自主的に行う場として活用してはどうかとの意見があった。また、この「プロデュース基礎演習」で学んだグループワークと1回生が学ん

ている映像制作の実習授業とどのように関わっているのか、サポートすることも必要ではないのかとの意見があった。

これらの意見等をふまえて、サブゼミアワーの時間帯を、授業支援学生となる映像学部の上級生が、1回生の学生とともに学ぶことのできる時間とする。

内容については、プロデュース基礎演習で学んだグループワークを活かして、グループ単位で映像制作し、成果物を作り上げるものとする。実際に、このプロデュース基礎演習を学んでいる Semester（映像学部ではクォーター）では、映像制作の基礎的な実習授業も開始しており、そこで学んだ映像技術を使いながら、グループで映像制作を企画し、ひとつの作品を作るという内容にする。ここでの1回生の自主的な活動をサポート・指導することを授業支援学生の役割とする。

また、「プロデュース基礎演習」で学んだプロデュース能力の実践として、映像業界で実際に活躍しているプロデューサーをゲストスピーカーとして、自主的な学びの場を企画、実行するという内容も想定できる。

このように、映像学部上回生である授業支援学生が1回生の学びたい内容に配慮しつつ、サブゼミアワーの学

びをプロデュースする。このことが同時に映像学部上回生である授業支援学生が、プロデュースを実践する場となる。

（例）サブゼミアワーで実施する内容

- ・グループワークでの映像制作（1回生で学ぶ映像技術を活かして）
- ・講演会、上映会（プロデューサーなどの招聘）

## 2. 研修プロセスの授業プログラム化・単位化について

これまでの研究・調査結果を踏まえて、授業支援学生の研修プログラムをまとめることとする。先進的な事例で、活動に対して単位化していることや、活動している授業支援の学生に対する自己成長などの教育的効果も高く、正課の授業として、その内容を保障することも非常に重要であると考えられる。また、多くの時間をこの活動に費やすことになる学生に対して、教育的な評価（単位）を与えることは、この活動をより取り組みやすくすることもできると考える。

以上のことから、この研修プロセスを授業プログラム化・単位化することを提案する（表3）。この授業では、

表3 講義シラバス（案）

科目名	開講期間	単位数	配当回生	担当教員
プロデュース演習（仮）	8Q（後期）	1単位	1回生以上	映像学部 基礎演習担当教員
講義形態	1クラスのみ 25～30名。ゼミナール形式。			
講義内容・授業目的	「プロデュース基礎演習」の授業を受けた体験や、これまでの映像学部で学んだ映像学、映像制作技術・知識を用いて、次の1回生のための授業をプロデュースするものである。プロデュースの実体験を通して、プロデュースに必要な能力を高めることを目的とする。			
到達目標	1. プロデュースするに必要な能力（企画力・実行力・実現力）を高めることができる。 2. プロデュース基礎演習の授業支援を通じて、積極性、社会性、責任感、コミュニケーション力、プレゼンテーション力、問題解決力を成長させることができる。			
評価方法	日常点・レポート（グループ単位でまとめた「授業支援計画」「サブゼミでの授業計画案」）			
講義スケジュール				
第1回	ガイダンス			
第2回	前年度実施のグループワーク方法について教員とディスカッション（FD的要素）			
第3回	グループワーク内容について教員よりレクチャー（KJ法、ロジックツリーなど）			
第4回	授業支援計画1（グループワークの実践方法）			
第5回	授業支援計画2（グループワークの実践方法）			
第6回	模擬授業			
第7回	模擬授業の反省点・改善点のディスカッション（模擬授業の録画を視聴しながら授業を行う等）			
第8回	サブゼミアワーでの授業（学びの内容）計画案作成			

次の授業支援学生となる1回生が、これまでの映像学部で学んだ映像学、映像制作技術・知識を用いて、次の1回生のための授業をプロデュース（グループワーク支援の企画から実行・評価）するものである。

この授業を受講することで、安定した授業支援を行えるようになり、授業を通して、再度「プロデュース基礎演習」で学習した、組織（グループ）としての活動を学習し、深めていくことができる。この授業を最初に受けた学生が中心となり、次の世代の1回生を、この授業でサポートすることで、組織内のタテヨコでの学びの関係が成立する。また、映像制作において基本となるグループでの活動を、この授業支援学生の組織内でも、実践できるようにする。この授業支援の学生が正課のサポートだけでなく、課外活動として、多くの映像学を深めるための機会（各種上映会や制作発表会の企画、学年を超えた映像制作の実施など）作る中心的な存在となることを期待するものである。

また、先進的事例にもあるように、教員が授業時間だけでなく、前述のサブゼミアワーの活動に対しても助言・指導することも必要である。職員についても、映像学部上回生である授業支援学生が実践する内容についてアドバイスを行うなどの体制を構築することが必要である。

## VI. おわりに

上記の政策は、映像学部生が自身の学部の学びを「プロデュース」するというものである。映像学部生による映像学部のための教学参画を実現するものであり、学ぶ意欲の高い一期生の力を活用できる政策であると考えられる。

### 【注】

#### 1) 映像学部

##### 【立命館大学 映像学部 概要】

学部学科名称：映像学部 映像学科

開設年：2007年4月 開設場所：京都府京都市北区等持院

北町56-1（衣笠キャンパス）

定員数：1学年 150名（完成年度600名） 教員数：専任教員 約20名

#### 2) オリター

オリターとは、新入生が大学生活を円滑に適應することをサポートする上級生の集団である。オリターとはその活動として、「学習」・「生活」・「自治」の3つの目的が設定されている。旧来より新入生の援助担当者として「援担」と呼ばれ、学生自治組織により、自治の基礎単位であるクラスづくりなどを目的として、代々引き継がれている。映像学部は、本年度開設の学部であり、上級生がいないため、各学部のオリターの有志を募り、発足した。

（寺本憲昭、伊藤昭、伊藤則男、中村成夫“学生活動の効果検証—オリター活動（上級生による新入生支援組織ケースに—）”、『大学行政研究』2号、2007年3月、p136）

#### 3) 「タテよこ交流に始まる学内サービス学習支援」『キャンパスサービスラーニング』（2004年度特色GP採択プログラム）

学生自らがキャンパス内でサービス活動を行うことによって、キャンパスの活性化、学生スタッフの人間の成長をめざそうというもの。『キャンパスサービスラーニング』は教養科目群の「キャリア教養」分野に属する授業科目だが、同時に課外活動でもある。Sanno Student Staff (SSS) と呼ばれる学生スタッフの活動を中心に、卒業生、在学生、入学予定の高校生と一緒に活動することで生まれるタテの交流。学生同士のヨコの交流。学生たちは活動を通じた達成感や充実感によって、豊かな人間性を形成する。（産能短期大学 ホームページより。http://www.sanno.ac.jp/tandai/1bu/gp1.html）

### 【参考文献】

- 1) 松本潔「『サービスラーニング』の理論と実践～NPOと大学における人的資源の協働事例～」『産能短期大学紀要』35号、2002年2月
- 2) 本郷真紹「エンrollment・マネジメントと教育支援『初年次教育の高度化の課題』」『大学時報』2007年7月、pp72-77
- 3) 寺本憲昭・伊藤昭・伊藤昇・中村成夫「学生活動の効果検証—オリター活動（上級生による新入生支援組織）をケースに—」『大学行政研究』2号、2007年3月、pp133-146
- 4) 「新入生先輩がサポート」読売新聞、2007年6月27日
- 5) 「学生 街（ガイ）ダンス『オリター団』」中日新聞、2007年8月28日
- 6) 勝方信一「大学職員は教育のプロデューサー」読売新聞、2007年7月21日

## Development of a Student Training Program in the College of Image Arts and Sciences: Class support for implementing the Production Basics Practicum course.

FURUSHIMA, Natsuki (Assistant administrative manager, Administrative Office, College of Image Arts and Sciences)

ITO, Akira (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

ASANO, Akito (Deputy Manager, Academic Affairs)

SAWADA, Hiroaki (Administrative Manager, Administrative Office, College of Image Arts and Sciences)

### **Keywords**

Student support, peer education, group work

### **Summary**

The College of Image Arts and Sciences began life in April 2007. Its educational content consists of training students in the “production ability” involved in image content by enabling them to learn about image arts and science from the three perspectives of art, technology (engineering), and business (economics). One of the courses for training students in this “production ability” is the Production Basics Practicum. Students learn “production ability” for themselves through working in small groups. The College assigned Class Support Students to help implement this group work. The Class Support Students, who were students in upper classes, offered detailed support, and the classes were well regarded by the students who took them, thus achieving their purpose. We are surveying and analyzing this experience by means of questionnaires and interviews, and by validating domestic and international case studies and other examples are developing a program to train Class Support Students who can make a contribution to the Production Basics Practicum from the 2008 academic year onward, for the purpose of carrying out research that will enable the content of the classes to be upgraded.

